記憶

カレーライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
記憶

【Ｎコード】
Ｎ９７０９Ｌ

【作者名】
カレーライス

【あらすじ】
記憶を消された元実験台２４号、レインはある研究所から脱出した後、さまざまな出来事を乗り越え、自分を狙ってくるある研究所の幹部を倒し最後には自分の記憶を消した敵、改造人間で世界を滅そうとするある男と戦う。
もう、更新できる意欲がなくなってしまいました。この失敗をもとに次から一からやり直そうと思っています。読者の皆様すいませんでした。

全ての始まり

ここはある研究所。そこにある青年が横たわっていた。青年にはチューブがたくさん繋がれており不気味な装置が動いていた。

「トコトコトコトコ」

長身の女が歩いてきた。どうやらここの研究員らしい。そして不気味な笑みを浮かべ、装置をいじり始めた。そしてモニターにはこう書かれていた。

【実験台２４号を解放しますか？】

その字の下にはｙ／ｎと書かれていた。女はｙを選択した。

「プシューーーーーーーーーー」

青年と装置をつないでいたチューブが次々と抜かれていった。女はそれを確認するとその部屋をでていった。・・・約２時間たった。横たわっていた青年が瞬時に目を覚ました。

「ここは・・・どこだ？」

全ての始まり（後書き）

初の連載小説です。できるだけ最初はシリアスな雰囲気にしたいのでよろしくお願いします。

実験台２４号

「ここは・・・どこだ？」
青年が言った。青年はその辺りを歩き回った。辺りには不気味な装置ばかりだ。青年は装置をいじろうとした。装置のモニターにはこう書かれていた。
【ユーザーネームとパスワードを入力してください】
「ユーザーネーム？・・・あぁ名前のことか。名前・・・あれ？俺は・・・誰だ？」
どうやら青年は記憶喪失らしい。
「どうやら名前をわすれたようだな・・・」
青年は冷静に言った。
「どこかに俺の名前が書いてあればいいが・・・」
青年は部屋の中を捜した。すると青年が寝ていたところの近くの机にカードがあった。カードにはこう書いてあった。
【実験台２４号　２１歳　２７６３】
「俺は実験台２４号・・・２１歳・・・実験台？俺は実験台なのか？それに２７６３というのはなんだ？」
青年は考えた。
「とりあえずこれを入力してみるか」
青年は装置にユーザーネームを実験台２４号、パスワードは２７６３と入力した。
装置にはこう書かれていた。
【ユーザーネームとパスワードが一致しません。念のため、研究員か確認を始めます。】
周りのライトが赤くなった。壁が開き３体のロボットがやってきた。ロボットたちは中心のライトの光を青年にあてた。
「ケンキュウインファイルトショウゴウチュウ・・・」
ロボットがそういった。数秒後・・・

「ケンキュウインファイルトイッチシマセンハイジョシマス」
ロボットはそう言いビームソードで斬りかかってきた！！

脱出・前編

「ケンキュウインファイルトイッチシマセンハイジョシマス」
ロボットはそう言いビームソードで斬りかかってきた！！青年はそこにあった鉄の棒でガードした！だが、ほかのロボットが斬りかかってきた！
「ハイジョカンリョウ」
ロボットはそういった。そのあとはほんの一瞬だった。
「ドガッビュッドガッビュッドガッ」
ロボットを叩く音とビームソードをかわす音が聞こえた
「グアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」
ロボットたちがそう言った直後ロボットたちは機能停止になってしまった。
「これは俺がやったのか・・・」
青年は自分自身の力に驚いていた。すると突如天井のスピーカーから声が聞こえてきた。
「３６号室に異常が発生しました。警備ロボットは支給３６号室に向かってください。」
「多分逃げたほうがよさそうだな。」
青年はそういうとドアへ走りだした。ドアの先は通路ばかりだった。ただ分岐があるだけでほかには変わりはなかった。青年は直感だけで進んでいった。ときどき行き止まりに進んでしまったりしたが、確実にこの建物の出口に近付いていると感じていた。
「とりあえず出口に着けば何とかなるだろう」
青年はそう思っていた。だが、ただ一つ、青年の進路を拒むものがあった。ロボットだ。青年が走っていた時、ロボットが来るといつも影に隠れてやり過ごしていた。見つかった時には応戦したがほかのロボットに応援を送られるので厄介になることは間違いなかった。

青年が走っていると若い男二人の声が聞こえてきた。
「なぁ実験台は何体いるんだ？」
「あぁ２５体だ」
「だがその１体がまだ感情を消し去れていなくてな」
「何号だっけ」
「２４号だ」
「ッ！」
青年は思った。俺だけが実験台のなかで感情を失っていない唯一の存在なのだと。
「その２４号の担当って誰なんだ？」
「あぁフェイスというやつさ。あいつは何を考えているのか分からない変わりものだ」
「呼んだ？」
男二人の後ろに青年を解放した女が立っていた。
「チッ何でもねえよ」
男の一人が言った。そして男二人は青年に気付かず歩いて行った。

脱出・中編（前書き）

これから「」の前にいった人の名前を書くようにしました。

脱出・中編

そして男二人は青年に気付かず歩いて行った。
だがそのフェイスという女は違った。
フェイス「そこにいるんでしょ？実験台２４号」
青年「俺のことがばれていたのか」
フェイス「すぐにわかっわよ。ほかの馬鹿二人は違ったけど・・・フフ」
フェイスは小さく笑った。
フェイス「まだ幹部にはばれていないわね…出口ならここからすこし東よ」
青年「お前は何をしたいんだ？」
フェイス「私は研究員ではないからね」
青年「なに？　じゃあおまえは・・・？」
フェイス「それはまだいえないわ・・・ほら、早く、出口に向かいなさい！」
青年「・・・あぁわかった」
フェイスは青年を通り過ぎ、歩いて行った。
青年「いったいなんなんだあいつは・・・」
青年はそう言い、走って行った。
走ってから１０分。スピーカーから声が聞こえた。
「１４号室に異常が発生しました警備ロボットは支給１４号室に向かってください。」
なんとそれはフェイスの声だった！・・・ここは放送室。
フェイス「さてと・・・覚悟をきめなきゃね私の使命は実験台２４号を解放することなんだから・・・」
近くから大勢の人が歩いてくる。
フェイス「はぁ・・・なんでスパイは使い捨てなのかしらね」
ドアが開いた。大勢の研究員とロボット、その前には普通の研究員

の白い服ではなく黒い服をきている男がいる。男が言った。
男「研究員？１５４フェイス、貴様を処刑する。」
大剣を持ち、男はそう言った。
フェイス「とうとう来たわね幹部？６ガース！」
フェイスは隠し持っていたダガーを持ってそう言った。・・・再び通路。青年は立ち止っていた。前にロボットがたくさんいるからだ。
青年「クソ・・・これじゃ進めない。戦おうとしてもあの数じゃ・・・」
青年は辺りを見た。後ろには倉庫と書かれた部屋がある。
青年「役に立つものが手に入るかもしれないな・・・」
青年は倉庫に入った。なかには研究についての本やファイル、薬などがたくさんあった。
青年「ん？実験台についてのファイル？・・・見てみよう。」
そこの中には紙が二十数枚あった。
青年「２２号について・・・２３号について・・・２４号について？・・・俺に関する資料だな・・・見てみよう・・・」
資料・２４号についてはこう書かれていた。
【実験台２４号２１歳　２７６３　レベル５　３６４２年、グレンシティで捕獲。説明・・・思考能力に優れ武器も使えるバランス型の最高レベルの実験台。しかし記憶は消したがまだ感情が消されていない。人間改造計画は進行しているので間もなく感情も消されるだろう。担当は研究員？１５４、フェイス。】
青年「とりあえずこれももっていこう・・・考えるのはあとだ。」
青年は薬が並んでいる所に向かった。暴走状態になる薬、毒薬、思考力を一定時間、格段に上げる薬などがたくさんある。
青年「回復薬などはないか・・・？」
青年がさがしていると、薬がたくさん並んでいるその奥に埃を被った小さな薬があった。薬にはこう書かれていた。
【回復薬・小】
青年「・・・これでいいか。ほかには・・・なさそうだな・・・さ

て・・・行くかな・・・ん？」
薬が並んでいる棚のその奥に大きな箱があった。箱の表面にはペンでこう書かれていた。
【これを使ってね。役に立つと思うから。フェイス】
青年は箱を開けた。中にはソードとハンドガンとハンドガンの弾が置いてあった。
青年「この鉄の棒よりはましかな」
さらにその下にはバックがあった。バックの上に紙が置いてあった。
【荷物を入れるにはこのバッグを使ってね】
青年「こりゃどうもご親切に」
青年はバッグに回復薬・小と資料・２４号についてとハンドガンの弾をいれた。ついでに鉄の棒もいれておいた。
青年「・・・行くか。」
青年はドアを開けた。
【倉庫で手に入れたモノ・・・ソード　ハンドガンとハンドガンの弾【合計３６発】　資料・２４号について　回復薬・小】

脱出・中編（後書き）

初の１０００字を突破しました。・・・疲れたーー。

脱出・後編

青年はドアを開けた。だがロボットの姿はなかった。
青年「いったようだな・・・」
青年は辺りを見回しながら進んだ。すると、男がやってきた。
男「ああもう、どこにいるんだよ俺は・・・せっかくの地図も役にたたねぇしよぉ」
どうやら男は迷っているらしい。手には地図を持っている。
青年「どうにかして地図を手に入れたいな・・・」
しかしどうやっても自分があの男に気付かれてしまう。
青年「仕方がないな・・・」
青年は飛び出しすばやく男の腹にパンチした。
男「ごはっ」
男は倒れた。
青年「どうやら気絶したようだな・・・ん?、ホルスターがある。そういえばこっちにはホルスターがないんだったな。」
青年はホルスターをつけホルスターにハンドガンを入れた。そして男が持っていた地図を持ち、地図にある出口を目指し、走った。
青年「しかし、なぜ出口の前に闘技場があるんだ?・・・まぁ考えてても仕方がないか」
【放送室】
フェイス「やるわね・・・私の完敗だわ・・・くっ」
フェイスはボロボロになった体で折れたナイフを持ちながら倒れた。どうやら気絶しているらしい。
ガース「こんな所にスパイが現れるとはな・・・こいつを殺すのは惜しい。警備ロボット達よ、1号室にこの女を運べ。丁寧に扱えよ。」
警備ロボット「ハッ」
警備ロボットは背中から担架を取り出しフェイスを乗せ、放送室を

でた。
ガース「しかし、あの女の目的はなんだったんだ？」
【通路】
青年は地図を手に入れた１５分後出口の前にある大きな部屋の入り口に着いた。だが、大勢の警備ロボットと戦っていた。その時、警備ロボットが右の通路を走って行った。
【放送室】
警備ロボット「ガースサマ！トウギジョウフキンデジッケンダイ２４ゴウトオモワレルモノヲハッケンシマシタ！ドウヤラケンキュウイン？１５４フェイスガカイホウシタトオモワレマス！」
ガース「何！？・・・そうか！読めたぞ！あの放送はロボットと実験台２４号を遭遇させないためか！！いますぐお前もその場所へ急げ！それと闘技場に戦闘ロボットを3体向かわせろ！」
警備ロボット「ハッ」
警備ロボットは通路へ向かった。
【通路】
警備ロボットとの戦いから１０分後、青年は傷つきながらも警備ロボットをすべて倒した。だが、これまででハンドガンの弾を２１発消費してしまった。【ハンドガンの弾・１５発】
青年「ハンドガンの弾は、あと3回ぐらい戦うと無くなりそうだな」
そのとき、スピーカーから青年は誰かわからないがガースの声が聞こえた
ガース「えー・・・警備ロボットは全員闘技場入口付近に向かい実験台２４号を排除しろ」
青年「くっどうやら俺のことが気付かれたようだな。早く先に進もう。」
「ドドドドドドドドドドドドドドド！！」
青年「もうきたのか！戦うしかない！」
その時警備ロボットの前に手榴弾が投げられた。
「ズドーーーーーーーーーーーーン！！」

煙の中でよく見えないが右には武装した男が立っていた。
武装した男「早く逃げるんだ！」
青年「誰だかわからないがすまない！」
青年は闘技場へ向かった。
【闘技場】
そこには普通の青い警備ロボットではなく赤いロボットが立っていた。その両手にはビームソードがあった。肩にはランチャーが取り付けられていた。
？「クククククククク」
男の声が聞こえた。床に穴が開いた。その中から眼鏡をかけた男が出てきた。
眼鏡の男「どうだい？このロボットは。かっこいいだろ？」
青年「だれだ？お前は。」
眼鏡の男「幹部？１０ヴィーだ」
青年「幹部？」
ヴィー「さてと・・・戦闘ロボットたちいきなさい」
戦闘ロボット「ハッ」
戦闘ロボットたちはランチャーて撃ってきた。だが、ランチャーの速度が遅いため青年は難なくよけた。
ヴィー「戦闘ロボットたちを甘く見ないで下さいよ」
戦闘ロボットたちは青年がよけた直後に二本のビームソードで斬りかかってきた。だがこれまでの戦闘の経験で戦闘ロボットたちの攻撃を全てかわして大きくジャンプした。
青年「これで終わりだ！」
青年は上空からハンドガンで戦闘ロボットたちに三発撃った。だがその銃弾は戦闘ロボットたちによけられた。
青年「さすが戦闘ロボットと言うところだな」
青年はハンドガンをしまい、ソードを持ち上空から戦闘ロボットたちを叩きつけようとした。戦闘ロボットたちはよけたがその衝撃波で戦闘ロボットは吹き飛ばされた。青年は戦闘ロボット二人をハン

ドガンで撃った。銃弾は戦闘ロボットに当たり、後ろから襲ってきた戦闘ロボットをソードで斬った。
戦闘ロボット「グアアアアアアアア」
戦闘ロボットたちは爆発してしまった。
ヴィー「私の・・・ロボットたちが・・・」
青年「そこをどいてもらおう」
ヴィー「外にいってどうするつもりだ？」
青年「わからない。だが俺はこのまま実験台のままいたくないんだ。記憶も取り戻したいしな。」
ヴィー「ここにいると改造人間としての名声がもうすぐ得られるんだよ？」
青年「改造人間？」
ヴィー「知らなかったのかい？改造人間は人間より思考能力、運動神経が格段にｕｐするんだよ。いいだろ？私は君が羨ましいんだよ私が改造人間になりたいぐらいだよ。」
青年「だがこのままいると記憶だけで無く感情さえも消されてしまう。それなら普通の人間でいい。」
ヴィー「君・・・知ってたんだね・・・なら仕方がない・・・あの方には悪いが・・・死んでもらうぞ！！」
そのとき後ろの壁が大きく開き、巨大な二足ロボットがでてきた。
ヴィーは二足ロボットの手に乗り、二足ロボットのコクピットへ乗り込んだ。二足ロボットは両手にあるバズーカを撃ってきた。辺りを爆風が襲い、青年は吹き飛ばされた。すると闘技場の壁が二つ開いた。
青年「この建物はどんだけ壁が開くんだよ・・・」
中から大砲がでてきた。
「ズドーーーーーーーーーーーーーーン！」
大砲から鉄球が撃たれた。
青年「あークソッ」
青年はギリギリでよけた。

青年「しまった！爆発してしまう！」
・・・が、爆発はしなかった。
青年「ただの鉄球かよ・・・」
ヴィー「よそ見している場合ではありませんよ！」
すぐにバズーカの弾が二つ飛んできた。
青年「仕方ない！」
青年は、ハンドガンを撃ち、バズーカの弾と相殺させた。
青年「何かいい攻撃手段はないか・・・」
青年はバックに入れておいた鉄の棒を思い出した。
青年「・・・そうだ！」
青年はバックから鉄の棒を取り出した。大砲から鉄球が撃たれた。
青年「それを待っていた！この・・・バッカヤロー！！」
青年は鉄の棒で鉄球を二足ロボットに思いきり打ち返した。鉄球は二足ロボットに見事当たった。
青年「・・・ホームランだな。」
二足ロボットは倒れた。どうやら爆発はしないらしい。ヴィーがコクピットから出てきた。
ヴィー「貴様・・・よくもおおおおおおおおおお」
ヴィーは青年を殴ろうとした。だが青年に腹をパンチされた。
ヴィー「ごはっ」
ヴィーは倒れた。どうやら気絶しているらしい。
青年「みんなが心配だが・・・いこう。」
みんなとは青年を助けてくれたフェイスと武装した男のことである。
青年は出口から研究所を出た。・・・脱出成功なのである。

脱出・後編（後書き）

・・・なんか言葉の使いかたすごく間違っているような気がする。

荒野を車は走る（前書き）

前、まもさんにびしばし悪いところを指摘されたので、いくつか変更点があります。

1、自分が情けなくて書けません。すみません。

2、「」の前に名前を付けるのをやめました。

それとキャラクターの容姿の説明が不十分と言われたので次にキャラクター説明を書きます。

この小説の読者のみなさん。本当にすいませんでした。

荒野を車は走る

青年は出口から研究所をでた・・・脱出成功なのである。

【研究所の外】

「嘘だろ・・・」

外は辺り一面荒野だった。

「おーい！」

遠くから声がした。遠くにいるのは青年と同じくらいの年の男だった。

「あなたは実験台２４号さんですね。」

「まぁ・・・そうだが。」

「僕はベイトと言います。あなたを研究所から解放しに来ました。」

「なぜ俺を？」

「あなたはこれから重要な存在になるからです。」

「なぜ？」

「それは言えません。上からの命令ですから。」

「そうか・・・」

「そう言えばほかの二人はどうしたんですか？」

「ほかの二人って誰だ？・・・俺を助けたフェイスとあの武装した男のことか？」

「武装した男とはダクのことですね・・・そうです。」

「二人はまだ・・・研究所だ・・・どうなっているかはわからない。」

「そうですか・・・なら仕方ありません。二人は置いていきましょう。」

「なんだって！？どうして二人を置いて行くんだ！！」

「仕方がないんですよ！！上からの命令なんです！！」

「くっ・・・」

「・・・いきましょう」

「・・・どこへだ。」
「クロックシティです。」
ベイトは青年を車に乗せ荒野を走った。
【闘技場】
「う・・・ごほっごほっ・・・ガース！！」
ガースは大剣を持っていた。
「あの方からの命令だ。お前には死んでもらう。」
「ま、まってくれ・・・」
「問答無用！！」
「・・・ズバァ！！」
ヴィーはガースに大剣で斬られた。
「ぎゃあああああああああああああああああああああ」
ヴィーはその直後、息絶えた。
【荒野】
研究所から出発してから３０分後。青年とベイトは巨大なサソリから逃げていた。
「なんでこんな所に巨大サソリが出てくるんだ！」
「ここは巨大サソリの巣なんですよ！」
ベイトはそう言いながら後ろからくる巨大サソリにマシンガンを撃っていた。車の横からまた巨大サソリが出てきた。
「きりがありませんね・・・振り落とされないように注意してくださいよ！」
ベイトは、ハンドルの下にあるスイッチを押した。
「ポチッ・・・ドギュウウウウウウウウン！！」
車は時速、３００キロを超えるスピードになった。
「うわあああああああああああああああああ」
青年は泣き叫んだ。後ろから見えたのは巨大サソリが小さくなる姿だった。
～３０分後～
「着きましたよ。クロックシティです。」

ベイトはそう言ったが、青年は気絶してしまっていた。

荒野を車は走る（後書き）

まもさんに悪いところを指摘されたとき、泣きそうになりました。

今さらだがキャラクター紹介【ネタばれあり】

【レイン】
年齢・・・２１
性別・・・男
身長・・・１６９ｃｍ
体重・・・６５？
武器・・・ソードとハンドガン
説明・・・元実験台２４号。記憶を消されている。ある研究所で記憶だけでなく感情までも消されようとしていたが、フェイスに助け出された金髪の男。成り行きで仮の名がレインになってしまう。【クロックシティにて】体を少し改造されたため、普通の人間よりも運動神経が高い。最初のレインの名前は青年となっていた。

【フェイス】
年齢・・・２７
性別・・・女
身長・・・１８２ｃｍ
体重・・・ヒミツ
武器・・・二丁のハンドガン
説明・・・政府のスパイで、ある研究所から実験台２４号を助けた赤い髪の女。のちにレインに助けられスパイをやめる。本当の職業は教師になりたかったらしい。自分の母親を殺したある男にいつか復讐してやると思っている。

【ベイト】
年齢・・・２１
性別・・・男
身長・・・１７２ｃｍ
体重・・・６８？
武器・・・マシンガン

説明・・・政府が作ったＫＳＨＧという組織の一人、車の扱いがうまい黒い髪の男。彼のマシンガンは自分が作ったものであり、装弾数が、普通のマシンガンより多い。上の人には絶対服従する男。将来、ＫＳＨＧのリーダーになりたいと思っている。ちなみに、レインという名前を付けたのもこの男である。

【ゲイル】

年齢・・・２７

身長・・・１７５ｃｍ

体重・・・７０？

武器・・・大剣

説明・・・依頼を解決してその報酬金で生活をする灰色の髪の青年。背中には大剣をつけている。メイカに好かれている。

【バイス】

年齢・・・１９

身長・・・１６６ｃｍ

体重・・・５７？

武器・・・ショートソード

説明・・・盗賊をしている茶色の髪をしていてニット帽をかぶっている青年。クロックシティの路地裏での一件からレインを兄貴と呼んで慕っている。彼が言う言葉の最後のほとんどには【ス】が入る。どうやら口癖らしい。恐るべき飛躍力を持っている。

【ダク】

年齢・・・４３

性別・・・男

身長・・・１６２ｃｍ

体重・・・８２？

武器・・・いろいろ

説明・・・政府が作ったＫＳＨＧという組織の一人、戦車が好きな太った茶色い髪の男、ＫＳＨＧ特攻隊の隊長。【ちなみに特攻隊のメンバーは彼一人】デブと言われると怒って手榴弾を適当に５～９

個投げる。
【ガース】
年齢・・・４３
性別・・・男
身長・・・１８０ｃｍ
体重・・・７６？
武器・・・大剣
説明・・・ある研究所の幹部？６である茶色い髪の男。真ん中に穴が開いている大剣を使う。ガースには子供がいたが、実験台４号にされてしまう。本人はむしろ喜んでいる。ヴィーを大剣で殺してしまう。
【ヴィー】
年齢・・・４８
性別・・・男
身長・・・１７８ｃｍ
体重・・・７５？
武器・・・なし
説明・・・ある研究所の幹部？１０である白髪の男。研究所のロボットの生みの親。新しいロボットを生み出そうと研究をしている。レインに勝負を挑むが負けてしまい、ガースに殺されてしまう。
【メイカ】
テイトの酒場の看板娘。ゲイルに恋心を抱いている。

これからもここにキャラクターを更新しようと思っています。

クロックシティ

「着きましたよ。クロックシティです。」
ベイトはそう言ったが、青年は気絶してしまっていた。
～2時間後～
「う・・・」
青年は目覚めた。
「やっと目覚めましたか。パンを買ってきましたので食べますか？」
ベイトはパンがはいっている袋を持ってそう言った。
～5分後～
「ふう・・・食った食った。」
「そうですね。」
「で、着いたのか？」
「はい。パンも買ってきましたしね。・・・さてと・・・いきましょうか。」
「フェイスとダクは？」
「目的地に着いたらそこにいる人に話してみます。」
「・・・わかった。」
二人は車の中から出た。外はこの町の端っこにあるさびれた駐車場だった。青年がふりむくとそこには荒野が広がっていた。
「この町には巨大サソリは来ないのか？」
「もちろん来ますよ。でもこの町には特別なシールドが貼られていてこの町を巨大サソリから守っているんですよ。」
「それにしても暗いな。」
「そりゃそうですよ。ここはクロックシティのアンダーワールドですから。」
「アンダーワールド？」
「この町にはアンダーワールドとこの上にあるスカイワールドがあるんですよ。」

「このアンダーワールドはどこでも暗いのか？」
「いや、明るいですよ。ここが廃墟なだけです。近いうちにここは取り壊すことになっていますよ。」
「なら、早く先にいこう。暗いのは少し苦手なんだ。」
「お化けが怖いんですか？」
「そんなもんじゃない！！・・・早く先に行くぞ。」
二人は駐車場を出た。そこはとても明るい所だった。人々の声や車の音も聞こえてきた。周りにはマンションが立ち並んでいた。
「まるで天井が高い地下デパートみたいだな。」
「そうとも言えますね。中心街へ行きますよ。目的地は上なんですから。」
「どうやっていくんだ？」
「いってからのお楽しみです。」
ベイトは手を挙げた。そこに走っていたタクシーが止まった。
「ほら、早く乗ってください。」
ベイトは青年をタクシーの座席に乗せた。ベイトも座席に乗り、ドアを閉めた。
「どこまでですか？」
タクシーの運転手が言った。
「タワーブリッジです。」
「わかりました。」
運転手はアクセルを踏み、走り出した。
「タワーブリッジってなんなんだ？」
「えっ君、タワーブリッジを知らないのかい？」
運転手は驚いた。
「はは・・・この人、この町に初めて来たもんで・・・」
「そうかいそうかい。きっとびっくりするよ。」
「ふーん」
青年は車の窓の先を見ていた。窓の先は人々の笑顔でいっぱいだった。

～１０後～
　車が止まった。
「タワーブリッジです。料金は１５４０円です。」
ベイトは財布から１０００円を２枚出した。
「お釣りはいらないよ。どうもありがとう。」
「どういたしまして。」
タクシーは、また走り出した。
「見てください、これがタワーブリッジです。」
目の前には大きな柱が立っていた。【２００ｍ×２００ｍ】
「・・・これのどこがすごいんだ？ただでかいだけだろ」
「いいですか・・・これはエレベーターなんです！！」
「だから？」
「うっ・・・」
「こんなものには興味ないんでね・・・」
「そうなんですか・・・と、とりあえず乗りましょう。・・・て、あれ？」
タワーブリッジの入り口にはこう書かれていた。
【今日の稼働時間は終わりました。また明日来てください。】
「・・・ほかに移動手段はないのか？」
「ないんです・・・ホテルを探しましょう。」
「・・・わかった。」
～５分後～
「今日はここに泊まりましょう。」
ここはタワーブリッジより少し離れた大きなホテルだった。ホテルの看板にはこう書かれていた。
【アンダースーパーホテル】
「どこがスーパーなんだか想像が出来ない・・・」
「後は私がやりますから、そこらへんでぶらぶらしていてください。あと、腕時計を渡しておきますから、１０時になったら帰ってきてくださいね。」

時計の針は8時を指していた。
「さてと・・・ぶらぶらしてきますか。」
青年は商店街に歩いて行った。

テイトの酒場

青年は商店街に歩いて行った。
「さて・・・どこに行こうかな。・・・地図屋？・・・いってみようかな。」
青年はタワーブリッジのすぐそばにある古くて汚れた店に行った。
青年はドアを開けた。なかにはクロックシティの地図があった。なかにはダンジョンの地図もあった。青年は興味津津に見ていた。
「ここに客が来るなんて珍しいのう。」
どこからか老人の声が聞こえた。奥の部屋から老人がでてきた。
「さて、どの地図を買うのじゃ？」
「いや、それが今、お金がなくてさ。」
「そうなのかい・・・」
「それじゃまたな。」
「気が向いたらまたきなされ。」
青年は地図屋をでた。
「なにか金を稼げる手段はあるのか・・・町の人に聞いてみよう。」
青年はそこに歩いていたいかにも強そうな男に聞いた。
「すいません」
「ん？なんだ？」
「お金を稼げる所ってありますか？会社や工場以外に。」
「それなら、ここから右にある酒場に行ってみな。そこの掲示板に依頼が貼られているぜ。」
「ありがとうございます。」
「おう。それじゃまたな。」
男は歩いて行った。
～2分後～
「ここが・・・酒場か。」
青年の前には大きなテントのような物が立っていた。看板にはこう

かかれていた。
【テイトの酒場】
「とりあえずはいってみるか。」
青年はドアを開けた。なかはパーティ会場のようだった。大勢の客でにぎわっていた。近くにいた酔った男が言った。
「おめぇも酒飲みに来たのかぁ？ここの酒はうめぇぞ～～～ひっく！」
「いや、掲示板を見に来ただけなので。」
青年は掲示板に向かった。そこには自分より少し年上の灰色の髪の青年が立っていた。
「あのー」
「・・・」
「あのー」
「・・・」
「あのー！！」
「・・・俺の事か？」
「・・・うん。」
「・・・どうしたんだ？」
「依頼とかどうやって受けるんですか？」
「やりたい依頼をとってカウンターに出すだけだ。」
「どうも。」
青年は掲示板を見た。
「迷子の捜索・・・荷物の運び人・・・人化け鬼討伐・・・荷物の運び人でいいか。」
荷物の運び人の依頼が書いてある紙にはこう書かれていた。
【クロックシティのアンダーワールドの2地区の俺のマンションから、4地区の彼女のマンションへ荷物を運びに行ってほしい。とても大切なものなので盗賊などに奪われないようにしろよ。報酬金は６０００円、失敗金は１０万円だ。失敗金が高いかもしれんが、荷物はとても高いものなので当たり前だ。くれぐれも失敗なんかする

なよ。】
「彼女か・・・荷物は指輪かな・・・まあいいか。」
青年はカウンターを探した。大勢の客の向こうに忙しそうにしているカウンターの女の子がいた。17歳ぐらいだ。青年はカウンターに向かって歩いた。その前に、あの灰色の髪の青年が酔った男の集団に、からまれているのがわかった。
「なあ～今酒の飲みすぎで、金がねえんだよ～ちょっと金貸してくれね～か？一緒に酒を飲ましてやるからよ～ぐひひひひひひひ」
「・・・」
灰色の髪の青年は黙ったままだった。
「おい～話聞いてんのか？」
「・・・」
「てめ～なんて言うんだ？あぁん？答えてみろや！！」
酔った男が、しだいに怒り始めていった。ついに灰色の髪の青年が口を開いた。
「・・・ゲイルだ。」
「ほ～ゲイルって言うのか～おいゲイル――」
酔った男が次の言葉を言う前にゲイルは言った。
「お前みたいなやつに俺の名前を言われたくないね。」
「なんだとごらあ！！ふざけてんのかてめえ！！」
酔った男が座っていたイスを持ち上げ言った。
「・・・カチャ・・・」
「・・・今、俺が持っている物が何かわかるか。」
ゲイルは背中にかけていた大剣の鞘から大剣を抜こうとしていた。
酔った男の集団が、後ずさりした。
「お、覚えていろよ！！」
酔った男の集団は逃げて行った。するとカウンターの女の子が言った。
「ありがとう！あの人たちには正直、困っていたのよー。私はメイカ、よろしくね！」

「・・・この依頼をやりたい。」
「あ、はいはーい。ダークタイガーの討伐ね。これが目的地に関する地図ね。」
ゲイルはドアのほうへ向かった。
「また来てよねー！まってるからー！」
「・・・」
ゲイルは酒場を出た。
青年はカウンターのところへ向かった。
「あのーこの依頼をやりたいんですけど・・・」
「・・・フフ。」
「あのー」
「あ・・・ごめんなさい！何の御用ですか？」
「この依頼をやりたいんですけど・・・」
「はい。荷物の運び人ですね。・・・ん！」
「あ～彼女か～私もあのゲイルさんの彼女になりたいな～・・・フフ。」
「あのー」
「え？なに？ごめん。君みたいなのはタイプじゃないんだ～」
「そういうことじゃないんだが。」
「え？あ～地図ね。」
メイカは青年に地図を渡した。
「いってらっしゃーい。」
青年は店から出た。
「・・・あの人はゲイルに夢中なのか・・・かわいい子だったのにな～。」
青年はそう言いながら地図に書いてある目的地へ行った。

路地裏

青年はそう言いながら地図に書いてある目的地に行った。
～２０分後～
「・・・ここか。」
青年は小さなマンションに着いた。
「ここの・・・８階だな。」
青年はマンションの８階に行った。地図には８階・６号室と書いてあった。
「４号室・・・５号室・・・６号室・・・ここだ。」
「ピンポーン・・・・・・・ガチャ」
ドアが開いた。そこには眼鏡をかけた男が言った。
「なんなんだ？」
「依頼をやりに来ました。」
「・・・ついにこの日が来たか・・・これが荷物だ。届けたら俺に報告してくれよ。」
「はい、では。」
眼鏡の男はドアを閉めた。
青年は荷物を見つめた。
「やはり小さい・・・指輪だな。」
青年はマンションを出た。
「今は何時だ？」
時計は８時３５分だった。
「まだ時間があるな・・・とりあえず急ごう。」
青年は次の目的地へ向かった。だがその前にトラックと自動車の事故現場が道をふさいでいた。
「仕方ない。ほかの道を探そう・・・あの道を行こうか。」
青年はそこにあった路地裏へ行った。
「それにしても暗いな。」

青年は路地裏を進んでいた。
「・・・っ！」
青年は上を見た。空からショートソードを持った青年が飛んできた。
「おらあああああああああ！！」
「ガキィ！！」
青年はなんとかソードでガードできた。
「こいつが盗賊か！！」
「俺は盗賊・バイスっス！！その荷物！！いただいていくっス！！」
バイスはショートソードで斬りかかってきた！
「くっ・・・はあ！！」
バイスの斬撃はガードされ、逆にふき飛ばされた。
「うわあああああああああああああああああ！！」
バイスは頭を壁に打ち付け、気絶してしまった。
「・・・早く行ったほうがいいな。」
青年は走って行った。だがその前に黒い虎がいた。
「今度は何なんだ！」
「グルルルルルル・・・グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」
黒い虎が走ってきた。青年は身動きもできなかった。
「危ないっス！！」
「バッ！・・・ドザアアアアアアアアア・・・」
なんと気絶したはずのバイスが青年を助けた。
「大丈夫っスか！！兄貴！！」
「あ・・・兄貴？・・・おい！また来るぞ！！」
「グオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」
その時、二人の前にゲイルが現れた。
「・・・ふ！は！はあ！！」
ゲイルは持っていた大剣で黒い虎を三回斬りつけた。
「ギャアアアアアアアアアアアアア！！」
黒い虎は倒れた。

「すごい・・・たった三発で・・・兄貴よりもすごいかもっス・・・」
「・・・大丈夫か？」
「あ、あぁ・・・」
「・・・ダークタイガーの討伐完了・・・帰るか。それじゃあな。」
ゲイルは青年達とは反対方向に歩いて行った。
青年がきいた。
「なぜ助けたんだ？」
「まあ、俺の兄貴っスから。」
「なぜ俺がお前の兄貴なんだ？」
「俺をすぐに倒したからっス。」
「でも、気絶してなかったんだろ？」
「気絶しましたよ。でも俺はもともと体が強いからすぐに治るっス・・・とりあえず、お前は俺の兄貴っス」
「なあ・・・そのスって言うのやめてくれないか？」
「できないっス。口癖っスから・・・あ！時間っス！じゃあまたっス！」
バイスは上空へと消え去った。
「・・・さて、俺もここから出よう。」
青年は走って行った。

人化け鬼

青年は走った。

～１０分後～

「さて・・・もうすぐ目的地だな。」

青年は言った。

「おーーーーーーい！！」

どこからか女の声がした。

「あなたが荷物を持ってきたんですよね！」

「え？どうしてわかったんだ？」

「依頼人から電話があったんですよ！荷物はどこですか？」

「あぁ・・・ここだ。」

「ありがとうございます！」

「・・・それは・・・指輪か？」

「あ・・・はい。」

「やっぱりな。それじゃあ。」

青年はテイトの酒場へ向かった。女もそばにあったマンションに戻った

～５分後～

青年はさっきの路地裏を歩いていた。その時、あの眼鏡の男【依頼人】が走ってきた。

「はあ・・・はあ・・・荷物は渡したのか？」

「あ、あぁ。」

「くそっ！手遅れだったか！！あれはダークストーンなんだ！！」

「ダークストーン？」

「説明してる場合じゃない！！とりあえずお前が荷物を渡したところまで戻るんだ！！」

～２分後～

二人は青年が荷物を渡した所まで戻った。すると荷物を渡した女

の悲鳴が聞こえてきた。
「リアあああああああああああああああああああ！！」
男はそう叫ぶとさっき女が戻って行ったマンションの2階へいった。
「なんだなんだ？」
「いったいどうしたのかしら・・・」
そんな事を言っている住民を無視し、男は2階の3号室のドアを開けた。青年も後から来た。
3号室の中には倒れている女と黒い人のような生き物がいた。
「人化け鬼めえええええええ」
男は持っていた木の棒で人化け鬼を殴ろうとしたがよけられ、爪で切り裂かれた。
「ぐわあああああああああああああ！！」
男は倒れ、気絶してしまった。
「強そうだが、倒すしかないか・・・」
人化け鬼はこちらの様子を見ている。
「とりあえず場所を変えないとな。」
「・・・タッ！」
「っ！？」
「ズバァ！」
人化け鬼は一瞬で青年を切り裂いた。
「ぐっ・・・こいつ・・・あの戦闘ロボットよりも強い・・・あれを使う時が来たか・・・」
青年はバックから回復薬・小を取り出した。そしてそれを飲んだ。
その時、傷が光とともに治った。
「さて、行くか！」
青年は人化け鬼の攻撃をギリギリでかわし、胸をソードで貫き、頭をハンドガンで撃った。だがまだ人化け鬼は息があるようだった。
「これで・・・どうだ！」
青年は人化け鬼をソードで貫いたまま、部屋を出て、人化け鬼を地面に投げた。

「ドガアアアアアアアアアアン！！」
人化け鬼はもう動かなかった。
～１０分後～
「うう・・・」
女と眼鏡の男が目覚めた。
「大丈夫か？」
「・・・すまない。そうだ！リアは！？」
「・・・大丈夫よ。」
「そうか・・・良かった。・・・報酬金だ。」
眼鏡の男は青年に１万円を渡した。
「報酬金は６０００円じゃなかったのか？」
「彼女を救ってくれたお礼だ。俺一人じゃ彼女を助けられなかったしな。」
「ありがとう。あなたのことは忘れないわ。よかったら私たちの結婚式に来てね。」
「あ、あぁ。じゃあな。」
青年はマンションから出て行った。

実験台２４号用武器倉庫

青年はマンションから出て行った。
「さて、金も手に入ったことだし、地図屋に行くか。そういえば時間はどうなっているんだ？・・・９時１５分か。・・・走ろう。」
～１０分後～
青年は地図屋に着いた。そしてドアを開けた。
「やっと来てくれたのかい。で、どの地図を買うのじゃ？」
「えーと・・・クロックシティの地図です。」
「５００円じゃ。」
青年は５００円を渡し、クロックシティの地図を買った。
「それじゃあ。」
「ああ。またの。」
青年は地図屋を出た。
「さて、戻ろうか・・・ん？」
地図屋の裏に小さな建物があった。青年はそこに好奇心で行ってみた。建物の看板にはこう書いてあった。
【実験台２４号用武器倉庫】
「実験台２４号用？はいってみよう。」
青年は倉庫のドアを開けようとした。だが、開かなかった。ドアの左にはパスワードを入力する機械があった。
「パスワード？・・・実験台用だから・・・あれか？」
青年はバックから２４号についてを取り出した。
「・・・この２７６３というやつか。」
青年はパスワードに２７６３と入力した。
「ウィィィィィィィィィィン・・・」
扉が開いた。青年は中に入った。中はとても暗かった。青年はそこにあったボタンを押した。部屋が明るくなった。部屋の真ん中には台座があった。青年は台座の上に乗った。どこからか声が聞こえた。

「実験台２４号であることを確認。」
台座の前の床が開いた。部屋は地下にあるらしい。青年は地下へ向かった。地下は明るかった。そのなかには、大剣、ダガー、ハンドガンなどがあった。その真ん中にカプセルの中に入れられているソードがあった。カプセルの真ん中に手を置く場所があった。
「一回置いて見るか。」
その時、外から少年の声がした。
「さて、ここに２４号はいるのかなー・・・ん？ビンゴ！」
どうやら自分を追ってきたらしい。その時、カプセルが開いた。青年はその中にあるソードを持った。
「タッタッタッ」
誰かがこちらに走ってくる。その少年はヴィーと同じ黒い服を着ていた。
「いた・・・２４号！抹殺しちゃうよー！」
少年はハンドガンで青年を撃ってきた。
「っ！」
青年は物陰に隠れた。
「どうやら幹部のようだな・・・」
青年は飛び出し、ハンドガンで撃った。・・・のはずだった。
「カチッカチッ」
「はっはっはっ！どうやら弾切れのようだね！！」
少年はハンドガンでまた撃ってきた。
「くそっ！」
青年はジャンプして天井を二つのソードで斬った。
「ガラガラガラガラガラ・・・」
部屋の入り口を瓦礫が覆った。
「そんなもので防げるか！！グレネード・・・ショット！！」
瓦礫の壁がほんの少し崩れた。
「壁が崩れるのは時間の問題だな・・・」
青年はハンドガンの弾を拾い、天井を斬って脱出した。そこはちい

さな公園だった。

深夜の戦い

青年はハンドガンの弾を拾い、天井を斬って脱出した。そこは小さな公園だった。
「早く逃げたほうがいいな。」
青年は走った。
「バンッ！」
後ろからハンドガンを撃つ音がした。青年の足元には弾痕があった。
「くそっ！もうきたか！！」
青年は右へ向かった。
「逃げられると思うな！人化け鬼よ！行け！」
どこからか人化け鬼が数十体やってきた。
「あんなもん全部倒せるか！」
青年は人化け鬼から逃げた。そばにバイクがあった。青年はバイクに乗った。そしてバイクで人化け鬼を振り切った。
～２０分後～
青年はホテルに着いた。青年は時計を見た。時計は９時５５分だった。
「ギリギリだな。」
青年はホテルに入った。ベイトがイスに座っていた。
「やっと来ましたか。ずっと待っていましたよ。朝は早いのでもう寝ましょう。こっちです。」
青年はベイトについて行った。
「あと、名前を記入するところにベイトとレインと書いておきましたからね。」
「・・・えぇ！なんで俺の名前を勝手に決めるんだよ！」
「だから、これからはあなたのことをレインって呼びますからね。」
「・・・」
「所でレインさん？」

「・・・？」
「あなた・・・依頼をやったりとかしてませんよね？」
「う・・・」
「やっぱりね。」
「私、あの時酒場にいたんですよ。」
「え、じゃあホテルにいなかったのか？」
「う・・・」
「まあ、どっちもどっちだな。」
ベイトは立ち止った。
「ここが私たちの部屋です。」
中はベット二つとテーブルセット、棚があった。
「早く寝ましょう。」
ベイトはすぐにベッドに横たわった。レインもベットに横たわった。
～４時間後～
　レインはまだ眠れなかった。フェイスとダクのことが頭から離れなかったのだ。
「・・・少し散歩に行ってこようか。」
レインはホテルを出た。その時バイスが走ってきた。
「兄貴！もうすぐここに人化け鬼がやってくるっス！早く逃げるっス！」
だが、バイスが言ったときにはもう遅かった。レインとバイスを人化け鬼が囲んでいた。
「お、獲物が二人もいましたか。実験台２１号と２４号！！」
「２１号だったのかお前！？」
「兄貴も２４号だったんスか！？」
「行け！！人化け鬼！」
人化け鬼が飛びかかってきた。レインはジャンプしてハンドガンで人化け鬼たちを撃った。バイスは敵の攻撃を避けながら高速で人化け鬼を斬ったり蹴ったりした。だが、人化け鬼の数は一向に減らなかった。しだいにレインたちも疲れていった。その時、人化け鬼が

飛んできた。どうやら息絶えているようだった。
「これだけいるとはな・・・」
人化け鬼たちの先にはゲイルが立っていた。ゲイルに人化け鬼が飛びかかってきた。
「邪魔だ！！」
「ズバァ！」
ゲイルは一振りで人化け鬼を薙ぎ払った。
「はっはっはっ！3人でこの人化け鬼たちを倒せるとでも思ったのか！？」
「3人じゃない。4人だ。」
空から銃弾の雨が飛んできた。人化け鬼が次々と倒れていく。
「上から援護しますよー！」
ベイトがこっちに叫んだ。銃弾の雨がバイスにも飛んできた。
「おい！俺は敵じゃないっスよ！！」
「ごめーん！標準がずれたー！」
「くっ・・・さすがにやられそうだな・・・ならば！」
少年は人化け鬼たちに何かの指示を出した。すると人化け鬼たちが少年のところへ集まり液体となった。
そしてその液体は少年を包んでいった。そして黒い巨人になってしまった。背丈はホテルと同じだった。巨人がしゃべった。
「俺は幹部？9！ブライ！貴様たちを処刑する！」
巨人は大きなこぶしで3人を殴ろうとした。だがよけられた。ベイトはベランダから巨人の肩にとび移った。そして目を撃った。だが、効いていなかった。ベイトは振り落とされてしまった。
「そこだ！」
ゲイルは大きくジャンプして巨人の肩を叩き斬った。巨人には少し効いていた。
「レインさん！これを受け取ってください！」
ベイトは手榴弾らしきものをレインに投げた。・・・もちろん爆発していない。

「それは携帯用核爆弾です！普通のよりは威力が落ちますが、それでもかなりの威力です！それの栓を抜いて胸に埋め込んでやってください！」
「わかった！」
「それなら俺がやるっス！」
バイスはレインから携帯用核爆弾を奪った。そして攻撃をかわし、巨人の胸に張り付いた。
「これで終わりっス！」
バイスは栓を抜き、携帯用核爆弾を巨人の胸に埋め込んだ。そして飛び降りた。その時、巨人が破裂してしまった。
「か、勝った・・・」
そのとき液体からブライが現れた。
「俺は・・・任務に失敗した・・・生きる価値なんてない・・・」
ブライは腰からダガーを取り出し、胸を刺した。
「ぐ・・・これで・・・いいのだ。」
ブライは息絶えた。
深夜の戦いは、こうして終わった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9709l/

記憶

2010年10月9日22時10分発行